

アーカイブ 通信 No.15

No.15

2018.3.1

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

◆tel: 042-540-1663 (事務局)

tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)

E-mail: simin-siryo@nifty.com

www.c-archive.jp

〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ

情報公開法制定から 20 年

政治家の関与は対象外？

～「知る権利」を脅かす制度の
制定過程を「知りたい」～

青島 頌 (毎日新聞記者)



成立してしまいが抜けましたが、その後もこの法律を検証する必要があると考えました。そこで法律の制定までの経緯や政治家の関与についての公文書を、担当の内閣情報調査室(以下、「内調」)に情報公開請求しました。法律が成立すると、政府は検討過程の文書の開示に応じるからです。

情報公開法では、関係省庁は原則として30日以内に開示・不開示を決定しなければなりません。この時は「対象文書が大量だ」として、特例延長の措置が取られました。結局、文書のコピーを手に入れることができたのは1年半後の15年夏でした。A4判の文書がコピー用紙の段ボールで7、8箱あったでしょうか。窓口で受け取った文書を台車に乗せて職場に運ぶ時に、わくわくしたのを覚えています。

◆一番知リたかったこと

開示された文書は、①第2次安倍晋三政権が始まった12年12月から、閣議決定された13年10月までに内調と関係省庁との協議の内容を記した記録、②法案の案文の移り変わり、③内調が閣議決定前後に各政党に法案の内容を説明した時の記録——から成っていた。

開館5周年記念集会

5月19日(日)午後2時30分 たましんRISURUホール

「記録・アーカイブする意味

—現在の民主主義を問う—

講師・瀬畑 源さん(日本近現代史研究者)

開館5周年記念講演会には、公・私文書を問わず、「記録し」、「アーカイブ」する意味、それらを共有財産としてどう使い・活用するのか、そしてそのことにより、どういう社会を目指すのかを一緒に考えていきます。

講師には、公文書を豊富に「つかう」経験があり、情報公開法や公文書管理等の制度を巡る問題に詳しい瀬畑源さんをお招きします。ご参加お待ちしております。

当日は1時15分～2時15分まで定期総会を開催します。

ました。

文書の大半は私のような素人には退屈な内容でしたが、①にはこの法律によって仕事に影響を受けそうな省庁が内調にいろんな質問をしたことが記録され、なかなか興味深く読める部分もありました。へどんな文書が特定秘密になりうるのかが分からな

◆法案作りに関する議員の役割

国の秘密管理に関わる法律は、東西両陣営が深刻な対立を続けていた1980年代から米国の要求を受けて、自民党が制定を目指していました。85年の中曽根康弘政権では自民党議員が議員立法で、国家秘密法(スパイ防止法)案として提出したことがありますが(後に廃案)。

近年では民主党政権が

市民活動資料を活用する

—「市民アーカイブ多摩」の今後を見すえて—

2019.1.14 於：一橋大学



この4月で「市民アーカイブ多摩」は開館から丸5年になります。さまざまな分野で活動する団体や個人の通信や会報などのミニコミ1700タイトルをファイル化してきました。この間、収集や保存に手いっぱいでしたが、次の5年は更に一歩すすめて、資料を活用し、その価値をより高めていきたい、との思いからシンポジウムを開催しました。司会は町村敬志（当会代表、記録は各報告者（いずれも会員）。

今回、「市民活動資料を活用する！」というテーマでお話することになり、はたと考え込んでしまいました。そもそも資料を「活用する」というときイメージしていることが、人によってバラバラなのではないか？と思えたからです。そこで、その点を参加者のみなさんといっしょに考えられるような報告にしてみようと思ったまま



平野 泉（立教大学共生社会研究センター）

読み手の中で何かが「活性化」されるとき

まず、なぜ「使用」や「利用」ではなく「活用」なのか？ということを考えるために、仮にではありませんが、資料を作った人たちが「作ったときの目的通りに使う」（例…総会資料を総会で使う）を「使用」、「本来の目的から多少離れた形で役立てる」（例…総会資料を活動30周年記念誌の編集に使う）を「利用」としてみました。そうしてみると「活用」は、たんなる「使用」「利用」+αの、何らかの形で資料をもつと「活かす」ような使い方、ということになります。

私自身も立教大学共生社会研究センターで仕事をしながら「ああ、資料が活かしているなあ……」と実感する瞬間があり

ます。例えば、ある人から調査を依頼されて来館された方が、調べているうちに偶然、お友だちが若いころ発行していたミニコミを目にして「はっ」とした瞬間。資料を読んでいる利用者に何か大きな「気づき」のようなものが起き、それが私たちスタッフにも伝わってくると、資料が「活かした」と感じるので。また、学生たちが授業やレポート作成の過程で資料を読み、そのなかで自らの学びや経験とつながる「発見」をして、そのことをコメントやレポートで伝えてくれたときも、資料を「よくぞ活かしてくれた！」という思いで胸が熱くなります。

オランダのアーキビスト、エ

2011〜12年、特別秘密保護法案として検討しましたが実現しませんでした。12年末に第2次安倍政権が誕生すると、名前を特定秘密保護法に改めて、わずか1年で成立に向かいました。自民党の町村信孝元外相（後に衆院議長、故人）を中心とするインテリジェンス（情報収集・分析）に詳しい政治家と、警察、防衛、外務の官僚が連携して立法を目指したように見えました。

◆官僚と政治家の関連の記録を
情報公開請求で開示された文書のうち③には、内調が法案の提出前後に各党を回って説明した記録はありましたが、説明は法案の骨格ができ上がった後の微修正のための場につきません。それも全部合わせても25枚ほど。政治家の名前と発

言部分はほとんどが真っ黒に塗られていました。各党の政治活動の自由を保障するためだというのですが、記者である私自身が説明会場に入って政治家と官僚の質疑を聞くことができたもので、「ノリ弁」のように隠されていました。

検証の対象にならないのは納得できない話です。
作成する公文書の範囲やルールを定めた公文書管理法は、省庁の意思決定の過程を合理的に跡付け、検証することができるよう文書を作成しなければならぬことになっています。そこには閣議や閣僚の出席する会議の記録は含まれるのですが、それ以外に政治家と官僚が協議した記録などが含まれるのかどうかはグレーゾーンのようなのです。

現在と将来のために必要な文書を作り、残すため、2つの法律をよりよく作り替えていくことが急務だと思います。
特に今年は情報公開法成立20年。現状にはどんな不備があるのか具体的に指摘し、みなさんと一緒に問題提起する記事を書いていきたいです。

リック・ケテラールによれば、資料は使われるたびに「活性化」(activate)のなさうです。書庫での休眠状態から目覚めて活性化された資料と、そうした資料に問いかけながら読む人との間には、時空間を超えたコミュニケーションの経路が開き、読み手の中でも何かが「活性化」される——私自身は、そうした双方の「活性化」が起こるとき、資料が「活用」されていると強く感じるようです。

会場では、参加者のみなさんからも、①「活用する」とはどんなことか、②「活用」の具体例、③「活用」のためのアイデア、について意見をいただきました。

①については、「問題に気づく」「過去の経験を現在の活動の参考とする」「読むことから新しい行動の芽が生まれる」「問題を共有する仲間の存在を知ることにより救われた気持ちになる」

……など、市民活動の実践に根差した意見が多く、市民アーカイブ多摩に集う人々の立ち位置がうかがわれます。特に「活用とは、未来の市民の利用を保障することだ」という意見には心を動かされました。時を超えた市民の学び合いを可能とする市民活動資料の力と価値を、深いところまでとらえた意見だと思えます。

③のアイデアについては、

多くの方がウェブでの発信強化(検索だけではなく閲覧も可能とする)を提案してくださいました。また、資料情報をうまく伝える編集・キュレーションの役割や、活用方法自体を発信する必要性を指摘する声もありました。やはり資料を活用してもらうためには、「こんな資料があるよ、こんな風に役に立つよ」ということをもっと楽しくおもしろく伝える工夫をしていかねばなりません。

私たちがつい「使用」や「利用」ではなく「活用」という言葉を使う時、そこにはおそらく、「市民の資料を死蔵させてなるものか!」という思いが込められています。今後も市民活動資料の「活用」について、みなさんと実践報告やアイデアをたくさん持ち寄っておしゃべりできればと思います。

「砂川平和ひろば」の

〈場〉が持つ力を活用する

高原太一(東京外国語大学大学院)



「市民活動資料を活用する」事例として、砂川闘争の

地元リーダーの1人、故宮岡政雄さんの遺した資料をもとに、砂川闘争の歴史を伝える「砂川

平和ひろば」(以下「ひろば」)の活動を報告します。

「ひろば」は、2010年に、宮岡さんの次女の福島京子さんが、元基地拡張予定地で、現在も目の前に自衛隊基地のフェンスがひろがっている場所に建てた私設資料館がベースです。この〈場〉は、「資料の保存・保管」歴史との出会いの場」「記憶する場」そして、「砂川から思考する場」としての機能があると考えています。

「ひろば」の特徴の1つが立地です。来館者は、館内に保存された史資料からだけでなく、その場所から見える風景からも、砂川闘争の歴史について考えを巡らすことができます。収蔵された資料と建物の外にひろがる風景が互いに連関しているところに「ひろば」がもつ固有性とアーカイブとしての可能性があるとと思っています。

砂川闘争という出来事／運動は1950年代に発します。しかし、その資料をいかに残し、そこにどのような価値を与えて「活用していくのか、そして現在もどのような「問い」を発しているのかを思考するのは、へいま・ここへの風景を生きる私たちの仕事です。資料の整理・保存をすすめると同時に、出来事から100年先の未来(2055年)に向けて、準備をしていきます。

多摩地域・社会教育実践 の特徴を活かす

三浦 健(元住民図書館運営委員)



かつて関わっていた住民図書館で、「現代の

破れ土蔵・住民図書館の資料を考える会員と利用者有志の集い」と称する試みをしたことがあります。資料を読みながら、住民図書館の今後を一緒に考えようというのが狙いでしたが、ゲストスピーカーなしに各自資料に取り組んでもらうことにしたところ、極端に参加者が減ってしまったことがありました。ナビゲーターなしに「資料の森」に取り組んでもらうのは負担が多い、との教訓だったのだと思っています。

「住民運動・市民運動の共同資料室」として出発した住民図書館は、名編集者でもあった丸山尚館長の個性を反映し、収集するミニコミは必ずしも運動関係のものに偏重してはいませんでした。図書館関係者の関わりが多く、活用例としては『ミニコミ総目録』刊行などの成果がありました。一方、市民アーカイブ多摩は、多摩地域の市民活動のつながりと都立多摩社会教育会館市民生活動サービスコーナー事業から引

き継いだ社会教育実践のノウハウが収集資料にも反映されており、活用という意味でも、その特性が今後の活動を支える財産になるようにも思います。

収集方針と収蔵スペース問題は別に考え、保存を担う後方支援的な協力機関の確保も必要だと考えています。

「私」の思いから

「活用」を語る

杉山 弘(町田市立自由民権資料館)



なぜミニコミを手にとり、読むのか、まずは自

身の行動観察から始めてみました。私の手元に届くミニコミのほとんどが、その作り手とは顔見知りです。だから、ぼくがミニコミを読むのには、友人の消息や考え、その生きかたなどを知りたいという動機や目的があります。「活用」には動機や目的がありますが、根本的には私的で個人的なことに基づくのだらうと思っています。だから「活用」については、急いで一般化せず、それぞれの経験や思い出から、語り始めるのがふさわしいのでは……と思います。

ミニコミは「市民が、自身や自分たちの考えを表現し、社会の

ありさまを自らの位置から描いてみせるものと、常々ぼくは思っています。そのミニコミを集積してゆく意義や思想を、市民アーカイブ多摩から発信してゆきたい——大きな意味では、これもミニコミの「活用」方だと思っています。

ある時、アーカイブの資料棚から、あるミニコミの厚く重いファイルを取りだし、時間をかけて読み通しました。読み終えて、印象に残ったのは「変化」でした。作り手の変化は運動する主体の変化であり、関連する政策の変化は課題の変化をもたらしていました。喜びをもって語られる変化もありますが、むしろ怒りや苦しみ、悩みや煩悶の言葉が記憶に残ります。運動の衰退や解体、分裂という局面でもあるのです。

市民アーカイブ多摩で出会えるミニコミ群は、いずれも集積され、整序されたものです。そうであるが故の発見だった、と思います。

多くの人の関わりにより

拡がる活用

江頭晃子(元市民活動サービスクーナー)

市民活動資料というメディアは、自主性、自由



性、生活者視点、独自性、運動性、双方向性、速報性……など多くの長所がありますが、一番の魅力は「伝えようとする事項とともに、それを発行している人も見えてくること」だと思っています。伝えたい問題はもちろんのこと、その問題に取り組む人となり、その人の人生観に触れられるのです。

現在進行形で活動している市民団体にとつての市民活動資料は、問題提起、同志との出会い、活動情報、自己認識、人権意識の醸成など具体的に活用できます。市民活動サービスクーナーで支援という仕事でも資料は欠かすことができませんでした。個人的にも人生の転換点や、悩む時にいつも資料に教えられ、自分らしい生き方の後押しをしてもらい、時にはそれが団体活動として発展してきました。

今後の活用のためには、①資料を読みこみ知りつくしてその魅力を伝えられる人を増やすこと、②資料群に必要とされる視点を当てて編集・加工すること、③市民活動資料を収集する他機関と連携して横断検索等を可能にするなど資料アクセスを良くすること、④収集・保存方法を広く伝えて市民活動資料を収集する機関を増やすことが大切だと思っています。

ミニコミに上手に出会える

と、ほとんどの人が魅了されることを考えると、一番の「活用」は、市民活動資料に触れる人を増やすこと。当会の資料整理や運営に、より多くの人が関わり、それぞれの魅了のされ方を伝えることが、より多様な活用方法を生み出すのだ、とも思っています。

□質疑応答

参加者 砂川闘争資料は、高原さんたちの実践以外にも立川市図書館や博物館などにもあるのではないかと、その関係は？

高原 「砂川平和ひろば」は私設資料館。公的な資料館に収蔵されているものは別途ある。個人的に持っている人もあり、所蔵者が亡くなってしまった後の問題もある。

参加者 江頭さんの報告にあった市民活動資料群の活用法としての「自己認識」の意味は？

江頭 同じことを目的に活動をしているいろいろな視点や運動展開がある。その中で、自分がどういう立場でどの視点を一番大事にしているのかを資料群を通して客観化するという意味で使った。

参加者 資料館として利用者にむと主張して、市民活動のハウツーを伝えてもいいのではないか。

江頭 ハウツーは難しいがノウハウを伝えたいと思うことはある。でも、同じ課題のように

〈新連載〉

市民アーカイブ多摩の四季

春 モクレン

当館を囲む樹林地の植物等の魅力
を東京大学名誉教授の邑田仁さんに
紹介していただきます。



初回は樹林地の中央にそびえるモクレン。3月の花の見ごろは圧巻です。資料閲覧と一緒に楽しみにいらしてください。

モクレンの仲間には学名でも英語名でもマグノリアと呼ばれる、花が大きくて美しい花木として親しまれています。日本にはコブシ、シデコブシ、タムシバ、オオヤマレンゲなどの野生種があり、いずれも白い花を咲かせます。ハクモ



植物園園長

クレンは中国原産で、コブシ(北地のものをキタコブシとすることも有る)と似ていますが、花弁9枚がほとんど同じ大きさで、最後まで完全に開かないことで区別できます。春早く他の花木に先駆けて純白の姿を表すこのハクモクレンには、マグノリアの花言葉さながらに、崇高さと威厳が感じられるようです。(むらた・じん 元東大小石川植物園園長)

みえても、運動展開はこれがベストとは言にくい。参考資料としては過不足なく提示して、読み手の主体性に任せたい思いもある。

参加者 市民アーカイブ多摩で困っていることなど、率直に語っていただければ。

杉山 目下の悩みはスペースの問題が一番大きい。収集方針をどうするかも課題。

参加者 海外に市民アーカイブのようなものはあるのか。

平野 アメリカは大学に収蔵されるケースが多い。大戦後、

図書以外の資料で大学が差異化をはかったこともあり、収集が活発化した。フランスは国立の専門機関があるが、ドイツはナチスの経験もあり、市民が運営するアーカイブのような形をとっている。ただ、3年で400万ユーロという莫大な連邦基金でデジタルアーカイブを構築した例もある。日本は市民の努力が大きいが、公文書館、図書館などでも集めている。ただし、どこも資金や人員などの面で厳しい状況にある。

参加者の感想から

・資料の活用のおされ方が、多くの方と共通していることが分かった。

・それぞれの立場で資料への思いを語られて参考になった。

・流通していない文献、公的刊行物ではない資料をいかに社会に紹介していくかということへの苦心が強く感じられた。

・文書館や図書館のノウハウだ

けでは上手いかないだけに、「活用」ということに頭を悩ますことが良く分かった。

・スピーカーの方たちの熱い思いが伝わってきた。

・市民運動、住民運動の資料を市民・住民の立場から収集し、後世に活用してもらおうのは大変有意義な活動だと思った。

・内容の濃いパネルディスカッションでした。

私と活動11 市民資料

私の仕事を支えるもの

竹中薫（目黒区社会教育指導員）



□身近にあったミニコミ

40年ほど前、まだ広い畑のある世田谷で、私は幼稚園の友だちの親たちが、自宅で行っているあそびの会に母と一緒に参加していました。

そこへ集う当時の母親たちがひとりの人として子どもと向き合う姿が『あめのかい通信』に記録されています。

「私たちは、女、妻、母親など日々ひきずっているものを土台に自分の目で見て、一人の人間にたち返ることができれば、という意図で、今年から『通信』を出すことに決めました。」（81年No.1）：「私の

声とことばで語ってみたい。子供向き 大人向きもない。向かい合ってその場を共有しながらはつきりと伝えたい。」（81年No.2）

母親たちが抱えていた思いを知ると同時に、幼い私を感じていた、会場の緊張感がよみがえります。そして、今でも私が大切にしている本や歌の根つこが、この活動にあつたことに気づかされました。

この通信は会が終了した後もガリ版のミニコミ『あめつつしん』として、多様な当事者、読者が投稿し、発行されています。母に届く『あめつつしん』

第5期緑蔭トーク

多士済済の顔ぶれで、第5期緑蔭トークを開催します。

いずれも会場は、市民アーカイブ多摩（8頁に地図）、時間は午後4時15分～6時、参加費300円。

話し手との距離が近く、人となりに触れられる会です。お気軽にご参加ください。

◆第1回 4月27日（土）

「生きる楽しさを伝えたい」
『共働学舎だより』をつくる

千野正世さん（共働学舎）

桑木なつみさん（共働学舎）

◆第2回 6月22日（土）

「国際NGO（市民組織）としてのグリーンピースの魅力と可能性」
吉野良子さん（国際環境NGO グリーンピース・ジャパン）

◆第3回 7月27日（土）

「砂川闘争資料の現在」
―〈砂川平和ひろば〉の挑戦―
高原太一さん
（東京外国語大学大学院）

◆第4回 9月14日（土）

「1970～80年代の日韓連帯運動を読む」
李美淑さん（市民活動研究者）

しん』の拾い読みは、ミニコミを身近なものにしてくれました。

□自分はひとりではない

私の最初の職場は、その後5年間働くことになる都立多摩社会教育会館の「市民活動サービスコーナー」でした。「市民活動団体・グループであればだれでも使える（活動ルーム）」であるこのコーナーには、ポスター印刷機や点字ワープロ室、集会室など思い出すだけでワクワクする充実した設備がありました。これらは開設以来30年に渡り、利用者の声と職員により整えられたものです。その後ろに広がる資料室には日々たくさんのかき紙やミニコミが届きました。それらの紙面から感じたのは、生活の中の怒りや生き

にくさは決してひとりだけの課題ではなく、自分はひとりではないということでした。疑問をもち、他人と共有し、学び合い、解決方法を探す、そうやって人は生きていくと思えました。

そのコーナーが廃止されようとした時、「多くの人に必要な事業であることを分かっただけに」「なくさないでほしい」と、ここで働く非常勤職員で組合の支部を作り、運動をしました。

当時作成したビラには小さなコラム欄があり、持ち回りで書いていました。私はコーナーが自分にとってどんな存在か、なぜ大切だと思うのかをいろいろな表現で書こうとしました。私自身が「伝えたい」という立場に立った時でした。

□いま、社会教育の場で

市民活動サービスコーナーが廃止されて17年。その内の10年余りを目黒区の社会教育施設で働いてきました。

地域の人との何気ない話の中から、ひとりで地域新聞を作る人、ひとりで待つことから子どもの居場所づくりを始めた人など、それぞれの場所が必要と感じたことを始め、仲間を得て継続する人たちを知り、出会うことができました。社会教育講座等で活動を紹介すると、そこから新しい活動や、つながりが生まれていきました。

市民活動サービスコーナーやミニコミから学んだ、当事者の視点から考えるということが、今私の仕事の土台となっています。

（たけなか・かおる＝運営委員）

ミニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信ミニコミを、発行者の方に紹介していただきます。

年輪通信

田無公民館で活動をしている自主グループ「バウムクーヘン」のメンバーが中心となり、地域福祉計画作りに市民の声を反映させるため、1993年「ひとり暮らし高齢者実態調査」を実施しました。地域でいつまでも暮らしたいと願う高齢者が望む福祉サービスがなく、先行き不安であることを知りました。そこで94年、12人の女性が「サポートハウス年輪」を立ち上げ、24時間365日のヘルパー派遣と夕食の配達を始めました。

バウムクーヘン時代に通信『この指とまれ』を発行して、地域の福祉事情や日本の現状を伝えていきました。これが現在の『年輪通信』の基になっています。



- ・1994年創刊、2000部、A4判、8頁、カラー、年4回
- ・年会費：6,000円(正会員)、3,000円(賛助会員)
- ・E-mail: npo-nenrin@nifty.com
- ・tel: 042-466-2216
- ・当館所蔵：13号(1997年) ~ 187号内容=おかげさまで25周年、2019年と思うこと、報告「学び舎祭」「秋の家族会」「子ども食堂みらい」、これからのイベント他

ます。地域の皆さんが福祉や介護に関心をもってもらうためのツールとしての『年輪通信』が誕生しました。

団体の活動内容の紹介だけでなく、介護保険スタート前後には、新しい情報を掲載することで、各地のNPO団体へ発信していく役目も負いました。NPO法人格取得までの経緯、介護保険スタートに向けてのモデル事業、グループホーム設立に向けての活動、そのための学習会、講演会の開催のPR、報告が紙面を占めました。編集委員を選出し、編集会議を重ね、愛称を「Patina(パートナ)」としました。表紙を絵手紙の講師の絵が飾ったこともあります。100号記念(06年8月1日号)には関わりのある多くの方の声を載せました。月刊から年6回発行に、さらにカラー刷りになってからは年4回になりました。配布先は全国の会員、市役所、公民館、図書館、地区会館などの公共機関、関係機関、地域の商店といった様々な所の協力を得てきました。また、

くらしと教育をつなぐWe

隔月誌として発行し続けて27年。人と人、人と情報がつながるネットワークが何より貴重な財産と思ってきました。元々、家庭科の男女共修運動の中でうまれ、男女平等教育を大きなテーマにしてきました。教育や女性だけでなく、若者の働き方や生きづらさ、セクシュアリティの問題、虐待やいじめ・暴力防止、グリーンフケアなどさまざまなテーマをとりあげ、「誰もが生きやすい社会」をつくるためのヒントとなるよう、各地で

通信の配布は手配りと郵送とで行ってきましたが、手配りして下さる会員の高齢化で、現在では郵送が主になっています。

現在は法人の活動の様子、イベントの紹介、旬な話題などを中心に、4年前からオープンしている「子ども食堂 みらい」や18年4月にスタートした「昭和の学び舎」が紙面を飾っています。紙面作りで大事にしていることは、読みやすい、わかりやすい、印象に残る、そして介護・福祉への関心が高まり、ひとりでも多くの方が参加いただける仕組みづくりに役立つ『年輪通信』にしていきたいと思っています。(安岡厚子)



活動する方へのインタビューと多様な連載で構成しています。とくに3・11と原発事故以降は、福島の問題を継続してとりあげています。

毎年、読者の会主催の「Weフォーラム」を続けています。また、「世代や性別、障害の有無、国籍を超えて多様な人たちが安心して集える場」が地域にあるといいね」という思いから、13人の読者と「コミュニティカフェ・スペースナナ」を開いて8年になります。ギャラリ、フェアトレードのショップ、講座などをするスタジオがあり、その一角に『We』を発行するフェミックスの事務所もあります。

スペースナナと『We』とは別の組織となっていますが、車の両輪で、人と情報が行き来するにぎやかなエネルギーが『We』編集・制作のモチベーションになっています。また、地域でゆるやかに支え合う場をつくりたいという願いをテーマに、若者や子どもたちを支援する当事者のお話を聞くスペースナナの連

- ・1992年創刊、1400部、A5判、80頁、表紙のみカラー、年6回
- ・定期購読：年5,700円
- ・E-mail: jimu@femix.co.jp
- ・tel: 045-482-6711
- ・当館所蔵：69号(1999年) ~ 217号内容=特集「つながりの中で生きる：「ファミリーホーム・ばあばば」ミシュカの森」/連載「沖縄ゲーター日記」「オホーツクの潮風荒く」「浦河ひがし町診療所物語」「ジソウのお仕事」他

いまの政権や国会のありよう、福島の問題など、無力感にとらわれそうになることばかりですが、それでも絶望するのではなく、人とのつながりの中に希望のタネを見出していきたいと思うのです。人々がゆるやかにつながり、連携できるような、そんなつながりの一助に『We』はなりたしいし、「スペースナナ」をそのための「社会を変えるたまり場」にしていきたいと思っています。

WEBの無料記事が当たり前の今、カラーページもない文字だらけの『We』の読者になってくれる人はよい意味で「変わり者」といえるかもしれません。経営的にはずっと低空飛行を続けていますが、読者の感想や意見に励まされながら、「あきらめずに、続けたい」という思いを新たにしています。(中村泰子)

記憶と記録の場をめぐる旅⑬

立命館大学国際平和ミュージアム

平和にみえる「今」を捉え直す勇気が湧いてくる

「15年戦争年表」を必死に書き写す自分がいた。このような年表と巡り合う機会はそう多くなかった。自分の身を守るような衝動だった。

◇二度と戦場に学生を送らない

太平洋戦争中、立命館大学は約3千人の学生を戦場に送り出し、およそ千人が命を失った。その経緯と反省の上に、「平和と民主主義」という教育理念を確立した。その理念の下、1992年に「国際平和ミュージアム」は、大学内に設立された。実物資料650点、写真資料550点を展示する他、映像資料、戦時中の町屋の復元、シアターなどもある。常設展示は、①「15年戦争」、②「現代の戦争」、③「平和をもとめて」の3つのテーマで構成されている。

テーマ①「15年戦争」という言葉に新鮮な耳触りをおぼえたことは我ながら恥ずかしい。同時期の戦争を示す「太平洋

戦争」「大東亜戦争」の方が私にとっては馴染みがあった。1931年の満州事変から45年の敗戦までを展示した室内で、戦争への実感を感じさせられた私の記憶を中心に紹介したい。

◇友人を戦争に送りだす

男の子が生まれ、すぐすぐと成長し兵士になっていく。展示の冒頭はそんなアニメーションで始まる。男児は徴兵制度のもとで軍事教練、徴兵検査をうけて、軍人勅諭を説かれ、兵士となっていく。女性や子どもも国民精神総動員運動によって戦争に協力させらる。現在では、とても想像し

得ない状況だが、展示は、当時その状況下で、確かに人が「暮らしている」ことを伝えている。

遺品の1つに兵士の鉄帽があった。「この兵士は大丈



夫だったのでしょうか？」という問いがそえられている。鉄帽をよく見ると左こめかみに小さな穴が開いていた。

入営兵士への手紙類は兵士を送り出す側の人々の存在を身近に感じさせる。中でも印象深かったのが、出兵する同僚へ送る似顔絵入り寄せ書きだ。中央の



日の丸を囲む似顔絵はユーモアあふれる。「お元気でね。私いつまでも待っているわ。未来の奥さんよ」「想い出してね。真面目な顔しているけど一度ハクションすれば吹き飛ばされるよ」。近い人への温かいメッセージは、身の回りの友人を彷彿させ、笑みがこぼれる。ハッと我に返る。友人を戦争に送り出す状況を考



えると、切なさに襲われた。

◇加害と被害、問われる自分

「15年戦争」展示の大きな特徴は、日本国民の加害と被害の両側面から展示をしている点だ。日本による朝鮮、台湾、南樺太の植民地支配と、中国、東南アジアの占領による加害行為に言及している。また総力戦に伴う空襲、沖縄戦、原爆の被害にも触れている。

アジアの人々に対する日本の加害行為について以下のようなたイトルの写真が連なる。「朝鮮に建てられた朝鮮神宮」「日本軍政下のフィリピンで日本語教育を受ける小学生」「徴兵検査をうける台湾の青年」「中国の戦地でトラックに乗って移動する慰安婦たち」など。

日本の被害は「焼け野原になった東京」「捕虜にされた沖縄の老人と子供」「爆心地から約700m付近で焼死した少年」などが展示される。館ではこれらの出来事を、日本国民の加害と被害という軸に沿い、15年戦争の文脈のうえで描いている。

一方自らの認識を振り返ると、それらは文脈から切り離され、独立させ、受け止めていたことに気づく。いまだ救済されていない戦争

犠牲者は、日本の国内、東アジアをはじめ世界各国に数多くいる。まさに自分の認識、態度が今も問われている。

◇戦争を防ぐための活動・視点

テーマ②「現代の戦争」では、2つの世界大戦から現代の紛争まで、今なお続く争いと、戦争を防ぐための様々な活動が展示される。またテーマ③「平和をもとめて」では、戦争以外の人間能力を豊かに花開くのを阻んでいる社会的要因を紹介している。そこには「平和とは、武力衝突がないだけではない」というメッセージが込められている。

一見平和にみえる穏やかな日々を、捉えなおす勇気を自分自身に与えたい。私たちにそう思わせるミュージアムだ。

(堀越比菜子「大学生、市民アイカイブ多摩利用、イラストも」)

立命館大学 国際平和ミュージアム

- ・所在地：京都市北区等持院北町 56-1
- ・tel：075-465-8151/fax：465-7899
- ・アクセス：京都駅より市バス 50「立命館大学前」下車徒歩 5 分他
- ・開館時間：9：30～16：30
- ・休館日：月曜日（～2019.3）、日曜日（2019.4～）、年末年始他
- ・入館料：大人 400 円、中高校生 300 円、小学生 200 円（団体割引あり）
- ・HPあり

アーカイブ多摩 日記

◆会員アンケート実施

これまでの活動を振り返り、今後に向けてのご意見を募集するため、会員の皆さまにはアンケートを同封しました。忌憚ないご意見をお待ちしています。

◆本音のミニコミ

毎年、レポート課題を与えられた学生さんの来館があります。本音が赤裸々に書いてあるミニコミは刺激的らしく「こんなメディアは初めて」と感動して帰っていく姿に励まされています。

◆資料保存先達からのエール

活動する中で、同じように資料を大切だと思っている方から所蔵資料の活用や寄贈先について相談を受けることがあります。昨年は五日市憲法発見の地に近いあきる野市養沢の江戸時代

からの蔵と町田市鶴川にある旧南多摩農村図書館に伺い、残された資料を閲覧しました。当会

が収集対象とする資料ではないため、寄贈先と一緒に探しています。いずれも当時の人々の生きざまと資料保存への思いが伝わってきて、1世紀前の先達からエールをもらいました。

◆2019年度会員・開館ボランティア・運営委員募集中心！

2019年度の会員と運営委員、開館を支えてくださる資料整理ボランティアを募集しています。市民活動資料の保存運動に知恵と時間を貸してください。

◆樹林開放日は3月24日

当館はNPO法人グリーンサソクチュアリ悠が保全する保護樹林地内にあります。その緑地の樹林開放日が3月24日(日)10時～12時に開催されます。木蓮の花が見ごろです(本誌4頁参照)。

運営委員会など

10月19日 第7回運営委員会。参加者9人。会員・カンパ者、当番確認、利用者報告(毎回)。1月催し再検討、「現場を訪ねる」内容確認、法人定款案、重点事業進捗他。
11月16日 第8回運営委員会。参加者7人。「アーカイブ通信」14号反省、現場を訪ねる・1月催し企画、19年度総会記念講演会、法人化設立趣意書検討他。
11月17日 「現場を訪ねる」第3回「登戸研究所」訪問。参加者14人。
12月15日 第9回運営委員会。参加者10人。1月催し役割分担、旧南多摩農村図書館訪問報告、会員アンケート案、総会講師、緑陰トーク検討、年賀状用写真撮影他。
1月14日 「原点から考える」第4回「市民活動資料を活用する」開催。参加者29人。
1月18日 第10回運営委員会。参加者6人。1月催し反省、緑陰トーク、総会記念講演会検討。19年度事業方針意見交換、各部会からの報告。会員アンケート案検討他。
※運営委員会は毎月第3金曜日19～21時。正会員の皆様の参加を歓迎しています。

会員数(2019年1月)

・146人(正会員58、賛助会員88)

◆新規入会ありがとう

・正会員 渡辺康弘さん
・賛助会員 髙原太一さん
・脱原発・東電株主運動さん

カンパありがとう

(2018年10～19年1月)

久保田ひろみさん、齋藤真弘さん、田中幹子さん、平野泉さん、山内佳江さん、山添路子さん、渡辺康弘さん

参加者・会員の声

・各地域のアーカイブとのネットワークを多彩につなげて互いに情報のキャッチボールをしつつ、共同企画の展示・発表の場を設定して開催していただきたいです。
・資料にアクセスするために「検索」できることが一番重要かと思う。大学図書館のネットワーク(ONLINE)やカールルなどと連携できると、より展開できるのではないかと。
・デジタル化(ネット等)の現状で、今後市民活動の記録がどう収集できるか、とても不安です。
・催しや「市民アーカイブ多摩」もおしゃれで楽しく、という方向性も欲しいと思いました。
・ネットで検索できるなどデータベース化、ITの利用は必要だと思いますが、一方で、そのビッグデータが住民管理や治安管理に利用される危険も感じます。

編集後記

市民活動・運動の使命として、ミッション(私たちが言える市民活動資料の保存)の実現と同時に、運動をいかに民主的にすすめていけるかということも共通する大事なミッションだと思ふ。そのためにも情報共有・運動の記録化は欠かせない第一歩なのだと思ふ(鈴・増・江)

【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-96-7
(多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel & fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1,700タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。
www.c-archive.jp

